
~ 昨日の明後日、今日の明日 ~

上村忍

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

～昨日の明後日、今日の明日～

【Nコード】

N1002P

【作者名】

上村忍

【あらすじ】

毎日にすり減らされて、ぼろぼろになっている俺があつたのは、あの日の俺だった。

営業の仕事と刑事の仕事は靴をすり減らしてなんぼだ！と言われたことがあったが、最近はそうでもないんじゃないかと思ってきた。

飛び込みで営業をかけても、むげなく追い返されてばかり。こんなことより、今流行りのツイッターやらなんやらでもっと効率よく営業できるような気がする。

ふと、時計を見た。11:57。最終の地下鉄はもうすぐ終わる。今から走って飛び乗るのも、なんだか悔しい感じがした。どうせ家までは地下鉄で2駅分だ。歩けない距離ではない。

重たい足を引きずって、とぼとぼと街中を歩いて行く。

歩く速さと、その人間の充実度は比例しているような気がする。目的地向かっていく速さがあればあるほど、充実した生活を送っている。とぼとぼと歩いてい僕は、負け組みなのだろうか？と思った。

夕食はパソコンに向かいながらパンをかじっただけだった。腹も減っているのか減っていないのかもわからない。「回転ずし」の看板に目が止まったので、なんとなく立ち寄ることにした。

「らっしやー」

深夜でも開いている店が増えた。こんな夜中に寿司を食っても、絶対新鮮じゃないとも思うが、店内は予想以上に混んでいた。さして大きくもない店なのだが、こんな時間にまで人がたくさんいるということは、飲んだ後に炭水化物が欲しくなる原理なのだろうか。

僕は、5席ほどしかないカウンターの端に腰かけた。

ヴヴヴヴ…

携帯が震える。時刻は12:00。開くと大きく「HAPPY BIRTHDAY」の文字がちよろちよろと動くキャラクターと共に出ていた。

そういえば、今日は僕の29回目の誕生日だった。日々の仕事に追いついてられ、土日も返上して働く毎日の中、誕生日を意識することもなかったが、忘れていた事には少しショックを受けた。

そうか誕生日か。29歳か。どうせなら今日はお祝いしようか。と少し大きくなった僕は、いつもは食べない絵皿に手を伸ばすことにした。

とはいえ深夜、なかなか回っている皿も少ない。

「ウ」

「ウニちょうだい」

と隣の男が同時に声を出した。気を取り直して、「ウニ、こっちもちょうだい」と言いなしたものの、「今のが最後の一つでした。すみません。」と返された。

男を見る。ずいぶん若い気がする。明らかに10代だ。こんな時間に一人で回転ずし、そしてウニを食べるなんて今時の奴は…と悔しく思った。

顔を見ると、なんだか懐かしい顔をしていた。

というか、懐かしい顔どころではない、10代の頃の自分と同じ顔をしていた。

その男自身も、こっちをしげしげと見つめてくる。なんだか似ているなあ？くらい思っているのかも知れない。

「ウニお待ち」

と、男の前に絵皿が乗った。男、いや少年というべきか。少年はなんだかばつが悪そうに、「よかったら、一ついかがですか？」と皿を差し出した。

「いや、いいよ。ありがとう」

「でも、僕のせいで最後の一つ……」

「いいんだ。最後の一つを食べなかったってことは、僕はついていなかったんだ」

「なんだか、すみません」

「いいよ、謝らなくても」

「つてか、どつかで会ったことありません？ なんだかどつかで見たことあるような気がするんですけど」

「僕もそう思うな。でも、君、こんな時間に回転ずしでウニなんてずいぶん豪勢だね？ 君、十代だろ？」

「はい。18です。」

「18で、こんな時間にウニか。やるなあ」

「今日、バイトの初めての給料だったんです。大学入って始めたバイトで、なんだか嬉しくて……」

「そっか。初めてのバイトかあ。懐かしいなあ……」

と言った瞬間、フラッシュバックが起きた。

僕はこの瞬間を知っている。

目の前にいる少年は、僕だ。

あの時、僕はバイトでもらった給料を握りしめ、ドキドキしながら好物のウニを食べようとしたんだ。そして、隣に座った気前のいい人に、未成年ながらビールをおごってもらい、たらふく食わせてもらったんだ。ウニの分の金額だけを払って。

あの時僕は、「大人ってすごいもんだなあ」って思ったんだ。こんな風に、重たい足を引きずって、身も心もボロボロになっているなんて想像もせずに。

「ビール飲むか？」

「え？僕、18ですよ」

「バイトの給料が入ったんだろ？祝杯をあげよう。気にするな」

「いや、悪いですよ。あつたばかりの人におごってもらうなんて……」
「いいんだ。大人は金が余ってるもんなんだ」

たらふく少年時代の自分におごってやって、店を出た。少年、いや、自分とは帰る方向が

違ったので別れた。もちろん、ウニひと皿分のお金はもらってある。

あの頃は、今の僕のような大人を夢見ていたのだろうか？29歳という年齢は、若いとは

言い難く、大人とも言い難い。

でも、あの頃に憧れた29歳がいたことは確かだ。憧れだった自分にはなれなかったけど、
ならなかったのも自分だ。

擦り減った靴を脱いでみる。これはこれでいいのかも知れない。ただ、もっと違う自分も

いるのかも知れない。明日の自分は変わるかも知れない。

そんな事を考えていると、とぼとぼ帰るのがあほらしくなってきた。早く帰りたい、早く

明日の自分になりたい。そんな衝動が湧きあがってくる。

そういう想いで右手をあげる。タクシーを止めようとすると、スツと僕の目の前で手をあ

げた女性がいた。歳はまだ若くきれいな女性だった。

「すみません、割り込んでしまいました」

「いいんですよ。次もまたすぐ来るでしょうし」

「本当にすみません。父が少し酔っぱらってしまったみたいで……」

「そうですか。全然気にしてないですよ」

「ありがとうございます。それでは遠慮して」

と言って、後ろにいた初老の男性に声をかけた。老人は、ステッキをつきながら、タクシ

ーに乗り込もうとした。歳は取っているものの、着ている服装は高級感にあふれている。

美しい娘と遅くまで酒を飲む。さぞかし至福の時なんだろうな、とふと思った。

老人は軽く会釈して、僕の前を通り過ぎた。そして、一瞬目を合わせて、ニヤリと笑った。

その目は、僕のよく知っている目だった。

タクシーが行くと、僕は家に向かって走り出した。今日があの時に変わるまで、走り続けようと思った。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、たんのう堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n1002p/>

～ 昨日の明後日、今日の明日 ～

2010年11月27日23時56分発行